青少年育成センターだより

第１８０号　２０２４．４．１

防府市教育委員会生涯学習課
青少年育成センター
０８３５－２３－３０１３

いよいよ令和６年度が始まりました。コロナの影もかなり薄くなり、子どもたちの学校生活も普通に戻ってきています。子どもたちには、夢や希望を胸に、学校生活を充実したものにしてほしいものです。

「一隅（いちぐう）を照（て）らす」について考える

前号「青少年育成センター第１７９号」で、中村哲さんの座右の銘として**「一隅を照らす」**という言葉を紹介しました（「一隅を照らす」とは、天台宗の開祖、最澄の言葉で「一人ひとりが自分のいる場所で、自ら光となり周りを照らしていくことこそ、私たちの本来の役目であり、それが積み重なることで世の中が作られる」という意味です）。

私たちは誰も一人では生きていけません。他の人とともに生きていくためにはお互いがお互いを思いやり、助け合うことでより良く生きていくことができるのです。一人ひとりが自分のできる「一隅を照らす」行動をすることで、誰にとっても生きやすい社会になるのだと思います。

ここで、私たちができる「一隅を照らす」行動について、考えてみましょう。

中村哲さんがアフガニスタンにおいてされた活動のような、水に困っている人々のために井戸を掘り、長い用水路を建設するという、大きな活動でなくてもいいのです。私たちが住む地域でできること、友達と一緒に学んでいる学校・学級でできることについて考えてみましょう。

街を歩いていて、ゴミを拾っている人がおられます。また、子どもたちが安全に登校・下校できるようにと暑い日も寒い日も交通立哨しておられる方がおられます。これらも「一隅を照らす」行動だと言えるでしょう。また、地域の自治会でお世話をしておられる方、児童民生委員や保護司などの活動をしておられる方も「一隅を照らす」行動をしておられるのです。学校の場面では、自らが教室に花を持参する子どもの行動は、学級の潤いのある雰囲気づくりに貢献しているという意味で「一隅を照らす」行動といえるでしょう。また、学級では、みんなが過ごしやすい教室になるよう、個人それぞれに係が決められ、子どもたち一人ひとりが与えられた係活動を責任もって果たそうとします。この子どもの行動も「一隅を照らす」行動なのだと思います。

哲学者・思想家である安岡正篤さん（１８９８年～１９８３年）は、次のような言葉を残しておられます。「賢は賢なりに、愚は愚なりに、一つのことを何十年と継続していけば、必ずものになるものだ。別に偉い人になる必要はないのではないか。社会のどこにあっても、その立場立場においてなくてはならない人になる。その仕事を通じて世のため人のために貢献する。そういう生き方を考えなければならない」（小さな人生論　藤尾秀昭　致知出版社）と。

安岡先生は、「一隅を照らす」ことを、立場立場においてなくてはならない人になると言っておられます。立場において、なくてはならない人になるためにどんなことをすればいいのか、子どもと一緒に「一隅を照らす」行動について一緒に考えてみましょう。

文責＝青少年育成センター指導員　藤村